

「人間の鼻」と「象の鼻」——対象言語とメタ言語

いきなりですが、次の英文はどんな意味でしょう：

- (1) People have noses. Elephants have trunks.

‘nose’ は普通「人間の鼻」、‘trunk’ は「象の鼻」、とすると(1)の意味は「ヒトは鼻を持っている。ゾウは鼻を持っている」……そんな当たり前や。でも(1)のホントの意味はたぶんちょっと違うのです。それは何かと言えば：

- (2) (英語では)「人間の鼻」のことは ‘nose’ と言うが、「象の鼻」のことは ‘trunk’ と言う。

と理解することができます。(1)はそのまま読めば確かに「人間は鼻を持っている。象は鼻を持っている」となります。この「人間は鼻を持っている」とか「象は鼻を持っている」とかいうのは、「人間」「象」という生物——現実世界を構成する部分——についてその特徴を述べたものですが、(1)が言いたいのはたぶんそういうことではなくて、「(日本語では『人間の鼻』も『象の鼻』も区別せずに『鼻』と言うが)英語では(2)で述べたように)それらを区別してそれぞれ別の語で表す」ということであると解釈できます。この解釈は、(1)は「言語外世界の事物について何かを述べている」というのではなくて、「言語外世界の事物を表す種々の表現に関して、その表現(の用法)そのものについて述べている」というものです。このように、ある文の表現が「言語外世界の事物」について述べているというのではなく、「言語外世界の事物を表す言語表現(の用法)そのもの」について述べていると理解される場合、その表現はメタ言語(metalanguage)として用いられていることになります。これに対して、通常の場合、すなわちその表現が「言語外世界の事物」について述べている場合は、それは対象言語(object language)の表現ということになります。これは簡単に言えば、「対象言語」は「モノについて述べるコトバ」、「メタ言語」は「コトバについて述べるコトバ」ということです。

そもそも「言語」というものは「言語外世界の事物(=モノ)」について述べるためのものだから、言語の表現の大半は「対象言語」ではないのか、と思うかもしれませんが、日常の言語表現の中には実は(1)のように「メタ言語」の表現と解せるものが(さりげなく)含まれていることがあります。たとえば接続詞 or を用いた次の表現を見てみましょう：

- (3) Which do you like better, apples or oranges?
(4) America, love it or leave it.
(5) ... 22 gigawatts, or roughly the output of 20 nuclear power plants. (TIME, 2012. 10. 1)

接続詞の or は A or B の形で用いられ、「A と B の間の選択」の関係を導入するのに用いられませんが、選択の関係を表すのだったら A と B は「モノ」として別物であるのかということ、そうとは限りません。たとえば上の(3)(4)の場合は、A と B ((3)の場合はそれぞれ apples と oranges, (4)の場合は love America と leave America) は確かにモノとして別ですが、(5)の場合は違います。(5)はドイツの太陽光発電について述べているものですが、22 gigawatts (=A) と roughly the output of 20 nuclear power plants (=B) は「発電量(=モノ)」としては同じです。そうすると「同じモノの間の選択」とは何かということになりますが、それは要するに、「モノ」は同じでもそれを表す「言語表現(=コトバ)」は同じとは限らないので、その同じ「モノ」を表す「コトバ」の可能性をいくつか提示して、その中から都合のよいものを選んでもらおう、ということです。つまり(5)の or は「コトバの選択」に関するものであるということで、「コトバについて述べるコトバ」、すなわち「メタ言語」の表現ということになります。このような or は、日本語では「すなわち」とか「言い換えると」などの言い方に当たります。次の例も同様です：

- (6) Harvard College ... offered admission to only 7.1 percent of the 27,462 high school seniors who applied - or, put another way, it rejected 93 of every 100 applicants, ... (The New York Times, 2008. 4. 1)
(7) The end of each segment and the division marking it from the next segment was termed the Setsubun (or seasonal division). (Melton (ed.) 2011: 795)

(6)は(5)と同様、同じ数量(この場合は、ハーバード大の志願者に対する入学許可者の割合)を表す言語表現の選択肢を二つ提示し、その一方は他方によって言い換えることができるということです。(7)は同じ日(「季節の終わり、季節の分かれ目」)について、それは日本では「節分」と呼ばれるが、英語で表現/説明すれば ‘seasonal division’ ということになる(すちわち、「節分」は ‘seasonal division’ と言い換えられる)ということです。

このように、英語の接続詞 or は「モノの選択」に関係する対象言語の表現としてのみならず、「コトバの選択」に関係する——コトバの選択肢を提示する——メタ言語の表現としても用いられるわけですが、これはすなわち、「モノの選択」と「コトバの選択」が同じ表現によって表されているということ、対象言語の表現がそのままメタ言語の表現としても用いられているということです。英語にはこのような「見えない文法」が案外多く、その意味で英語は tricky な(=思わぬ困難や落とし穴が潜んでいる)言語であると形容できるかもしれません。今まで見えなかった側面が見えるようになってきたら、それだけ英語の語学的センスが向上したということになります。